

介護予防従事者のコミュニケーションスキルに関する研究

介護予防マネジメントコース
5006A338-9 富澤栄子

研究指導教員：岡浩一朗助教授

目的:

介護予防は、「高齢者本人の自己実現」あるいは「生きがいを持って自分らしい生活を創る」ことを目指す手段である。「心身機能の改善」、特に諸活動の根源にある手段的能力である運動器の機能を向上させることにより、「生活行為」、「参加」等の生活機能全般を改善させることが重要なポイントである。そして、多くの人は介護予防や生活習慣病予防のために、運動器の機能向上や身体活動実施の重要性を理解している。しかしながら、人が健康行動を獲得し、長期にわたって維持することが難しいことが知られている。介護予防事業従事者が、高齢者の主体的「参加」と運動の継続を促すためには、トレーニング実践法や行動科学の理論等の知識とともに、介護予防の対象者のセルフ・エスティーム、セルフ・エフィカシー、ヘルスリテラシーを高めていくコミュニケーションスキルが非常に重要である。

本研究では、保健福祉医療従事者、特に介護予防事業従事者に対するアサーションの概念を含むコミュニケーションスキルの評価尺度を作成する。また、作成した尺度によって評価されたコミュニケーションスキルと介護予防事業従事者の属性や介護予防支援へのセルフ・エフィカシーとの関連性を明らかにし、介護予防に従事する人材を養成していく上での基礎資料を得ることを目的とした。

方法:介護予防事業に従事する19歳～71歳の介護職、医療職等523名を対象に郵送による質問紙調査を実施した。介護予防事業従事者のコミュニケーションスキルの評価尺度を作成する目的で22項目の質問と介護予防事業従事者の介護予防支援へのセルフ・エフィカシーを評価する1項目の質問を準備した。

介護予防事業従事者のコミュニケーションスキル尺度の項目(全22項目)について、各項目の正規性を確認した後、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を

行った。また内的整合性の次元の信頼性について検討するために α 係数を算出した。

介護予防事業従事者の属性によるコミュニケーションスキル得点の差異についてはt検定を用い、さらに介護予防支援セルフ・エフィカシーへの属性およびコミュニケーションスキルの影響についてはSpearmanの相関係数と重回帰分析により検討した。

結果と考察:

介護予防事業従事者のコミュニケーションスキルの評価尺度の得点における探索的因子分析の結果、「自己統制的コミュニケーション」因子(6項目)、「協調的コミュニケーション」因子(7項目)、「アサーティブコミュニケーション」因子(3項目)の合計3因子16項目からなる介護予防事業従事者のコミュニケーションスキル尺度が作成された。コミュニケーションスキル評価尺度の因子ごとの α 係数は.73-.80と比較的高い水準にあり、内的整合性の次元の信頼性が認められた。本研究で作成されたコミュニケーションスキル評価尺度の項目は、対人コミュニケーションに関連する3要素と解釈可能であることより、評価尺度の項目内容は妥当であったと考えられる。

本研究の対象者の属性とコミュニケーションスキル尺度得点との関連については、経験年数には関係なく、女性は男性より協調的であり[t(504)=3.38, p<0.001]、男性は女性よりアサーティブな傾向であること、さらに高年齢群が低年齢群に比べて「自己統制的コミュニケーション」因子[t(499)=4.47, p<0.001]、「協調的コミュニケーション」因子[t(499)=3.83, p<0.001]、「アサーティブコミュニケーション」因子[t(499)=2.83, p<0.01]のすべての因子において、有意に高いことがわかった。高校生を対象とした先行研究においても、女性は協調性、受容性が高く、男性は主張性が高い傾向にあるという報告があり、本研究の結果と同様の傾向が得られている。高年齢

群が若年齢群に比べてコミュニケーションスキル尺度得点が有意に高いのは、対人コミュニケーションを含む社会的スキルは、学習によって獲得されるものであり、社会経験を積むことにより、その環境内でさまざまな強化を受けることによって、またモデリングすることによって、コミュニケーションスキルも向上していくと考えられる。なお、経験年数とコミュニケーションスキル尺度得点との関連がなかったのは、転職、再就職等により介護予防現場での経験年数と年齢が、比例していないケースが多いことを反映していると考えられる。

介護予防事業従事者の介護予防支援セルフ・エフィカシーに及ぼす対象者の属性とコミュニケーションスキルの影響については、**Spearman** の相関係数において、年齢と各コミュニケーションスキル得点が、介護予防支援セルフ・エフィカシーと正の相関にあることが分かった。さらに重回帰分析を行った結果、「自己統制的コミュニケーション」、「アサーティブコミュニケーション」のみが、

介護予防支援セルフ・エフィカシーに影響を及ぼしていることが確認された。「自己統制的コミュニケーション」は、感情をコントロールしながら対応するスキルであることから、相手を受容するためには必要不可欠であり、介護予防の対象者のセルフ・エフィカシーを高め、維持するコミュニケーションスキルとしては、その場の状況にあった、その場にふさわしい方法で率直で誠実に関わる、「アサーティブコミュニケーション」スキルが、より効果的な介護予防事業の実践において重要であることを示唆している。

今後は、相手と自分との心理的距離やタテ・ヨコの関係の場の認知が、保健福祉医療分野での、コミュニケーションスキルにどのような影響を及ぼしているかについても包括的に検討していく必要がある。さらには、コミュニケーションスキルを高めるための効果的なプログラムの開発とその効果検証を積極的に行っていくことが望まれる。